よろこびの知らせ

―礼拝メッセージより―

11

よろこびの知らせ
第 11 集

目　　次

いったいこの方は …… 1
ルカ 8:22-27

五千人の給食 …… 10
ルカ 9:10-17

わたしを誰と言うか …… 19
ルカ 9:18-22

変貌の山で …… 28
ルカ 9:28-36

ここに収められたメッセージは、2020 年 8 月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は “Gospel Project” に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

© 2020, Philip Nakao

いったいこの方は
ルカ 8:22-27

8:22 ある日のことであった。イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われたので、弟子たちは舟を出した。
8:23 イエスが舟にお乗りになると、弟子たちも従った。
8:24 すると、見よ、湖に大暴風が起こって、舟は大波をかぶった。ところが、イエスは眠っておられた。
8:25 弟子たちはイエスのみもとに来て、イエスを起こして言った。「主よ。助けてください。私たちはおぼれそうです。」
8:26 イエスは言われた。「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちだ。」それから、起き上がって、風と湖をしかりつけられると、大なぎになった。
8:27 人々は驚いてこう言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

一、聖書とキリスト

かなり以前のことですが、アーカンソーにパッション・プレィを観にいったことがあります。エルサレムの城壁などが、野外劇場に本物そっくりに作られていて、そこをローマ兵の装束をつけた俳優が馬に乗って走りまわる場面からパッション・プレィが始まりました。映画のロケーション撮影を見ているような感じでした。照明を使って様々な効果を出すため、このパッション・プレイは夜だけ上演されます。それで到着した夜パッション・プレイを観て、翌日、帰る前、ギフトショップに寄りました。そこに、イエスの顔を描いたものがあったのですが、良く見ると、聖書の言葉で描かれていて、文字

に濃淡をつけ、イエスの顔が浮かびあがるように作られていました。私は、それを見て、「聖書は、どのページも、イエス・キリストを描いている。聖書のどこを読むときにも、そこにイエス・キリストを見出すように読まなければならない」と思いました。

ヨハネ 20:31 に「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである」とあるように、聖書は、イエスを指し示すものとして書かれました。テモテ第二 3:15 にも、「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです」とあります。イエスご自身も「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです」（ヨハネ 5:39）と言っておられます。

ユダヤの人々は、聖書を大切にしました。各地に「会堂」があって安息日ごとに聖書が朗読され、解説されていました。聖書を書き写し、それを研究する「律法学者」と呼ばれる人たちは人々から尊敬されていました。しかし、彼らは、聖書を事細かく研究してはいても、聖書の中にキリストを見ることがなかったのです。「木を見て森を見ない」と言いますが、聖書の全体を見て、そこにキリストを見出すことがなかったのです。それで、イエスは、「聖書が、わたしについて証言している」と言い、聖書にキリストを見出すようにと言われたので

す。

聖書は神の言葉です。神はそのお言葉で世界を創造し、それを保っておられます（ヘブル 11:3; 1:3）。また、「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。…生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです」（ペテロ第一 1:23; 2:2）とあるように、神の言葉は信仰者を生み出し、成長させ、最終的な救いに導きます。ヤコブ 1:12 に「みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます」とある通りです。

聖書のラテン語への翻訳に生涯をささげた聖ヒエロニムス（St. Jerome）は、「聖書を学ぶことなしに、キリストを知ることはできない」と言いました。これは、「キリストを知るためでなければ、聖書を学んだことにはならない」と言いかえることができると思います。聖書は、歴史として正確なものですから、歴史家にとっては貴重な資料です。また、文学者も、あらゆる題材を聖書から得ています。芸術家は、絵画、彫刻、建物、音楽などで聖書からインスピレーションを得ています。私は、『目からうろこ』という本に、私たちが知らず知らずのうちに使っている言葉の多くが聖書から来ているかについて書きました。「目からうろこ」というのも、じつは聖書の言葉です。しかし、人は、聖書の派生物や副産物によって救われはしません。聖書をキリストを証しする

ものとして読み、聖書によってキリストを知るのでなければ、救いはないのです。私たちは、これからも、聖書をキリストに導き、救いを与えるものとして読み、学び続けたいと思います。

二、神の御子イエス

きょうの箇所には、イエスがガリラヤ湖の嵐をしずめた奇蹟が書かれています。聖書がイエスのなさった奇蹟を数多く書いているのは、なぜでしょうか。それはたんに珍しい話を伝えるためではないはずです。最初にとりあげたヨハネ 20:31 の御言葉は、30 節から読むと、こうなります。「この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」ヨハネの福音書では奇蹟は「しるし」と呼ばれています。英語でいえば “Sign” です。「サイン」というのは、交通標識にせよ、広告にせよ、何かを指し示すものです。フリーウェーでは、サインに従って出口を出れば、別のフリーウェーに乗り換えたり、ガス・ステーションに立ち寄ったりすることができます。イエスの奇蹟は、イエスを指し示す「サイン」です。弟子たちは、イエスがガリラヤ湖の嵐を一言で叱りつけ、それをしずめたのを見て、「いったいこの方はどういう方なのだろう」と驚き、また自らに問いかけました。奇蹟が指し示すキリストに目を向けたのです。私た

ちも、ここから、「いったいこの方はどういう方なのだろう」ということを真剣に問い、そして、その答を得たいと思います。

弟子たちは、これまで、いくつものイエスの奇蹟を見てきたのに、どうして、この奇蹟にこんなに驚いたのでしょうか。それには、ふたつの理由があると思います。ひとつは、16 節に、「風や湖までが言うことをきくとは…」とあるように、この奇蹟が自然界に対する奇蹟だったからです。ルカ 7:21 に「ちょうどそのころ、イエスは、多くの人々を病気と苦しみと悪霊からいやし、また多くの盲人を見えるようにされた」とある通り、イエスは苦しむ人、ひとりひとりを相手にして、奇蹟を行いました。イエスは、大勢の人を癒やすときも、「ひとりひとりに手を置いて」癒やしておられます（ルカ 4:40）。そのことは、私たちひとりひとりを心にかけてくださる、イエスの細やかな愛情を教えています。

けれども、きょうの箇所では、イエスは、ガリラヤ湖と、そこに吹き荒れる嵐を相手にし、それを服従させています。弟子たちはイエスが「メシア」（キリスト）に違いないと感じていました。しかし、「メシア」といっても、いろんな意味があります。軍事力で外敵を打ち破ってくれる人物も、政治的な力を発揮して人々に繁栄をもたらしてくれる人物も「メシア」と呼ばれました。「メシア」は神から遣わされた人ではありますが、人々の中から神によって選ばれ、神の力を与えられた人であって、ほんとうに神のもとから来られた神の御子であ

るとは思ってもいませんでした。けれども、イエスが風と湖をしかりつけ、それを治めた姿を見たとき、弟子たちは、イエスがたんに「神の力を帯びた人物」という以上のお方、自然界を支配しておられるお方だということに目が開かれてきたのです。

この世界は、神により、その力ある御言葉によって治められ、保たれています。そうであるなら、被造物に命じて、それを従わせることができるイエスは、創造者であり、神の御子であるということになります。ヘブル 1:3 に「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます」とあるように、イエスは父なる神とともにこの世界を創造し、それを治めておられる神の御子なのです。この奇蹟は、イエスが、神のもとから来られた救い主、神の御子であることを証ししています。

三、主としてのイエス

弟子たちがこの奇蹟に驚いた、もうひとつの理由は、この時、彼らの自信が見事に打ち砕かれたからでした。ガリラヤ湖は、漁師であった弟子たちにとっては、自分の庭のようなところでした。彼らはガリラヤ湖の隅から隅まで知り尽くしていました。そこで漁船を操ることは、まことにたやすいことでした。ですから、イエスが向こう岸に行くため舟に乗り込んだとき、弟子たちは、「おやすいご用です。さあ、行きましょう」と舟を漕ぎ出したことでしょう。弟子たちは空模様を見、吹く風の向きを肌で感じ、これなら、時折、ガリラヤ湖に吹き荒

れる嵐も、今日は絶対に無いと、自信を持ちました。イエスは舟に乗り込むと、すやすやと眠ってしまいました。休息をとることもできないほど忙しいイエスにとって、この船旅は何者にも妨げられないで、身体を休めることができる絶好の機会だったのでしょう。眠っておられるイエスの姿を見て、弟子たちはこう思ったでしょう。「イエスさま、安心して休んでいてください。私たちが、無事に向こう岸にお連れしますから。」

ところが、思いがけず舟は嵐に。弟子たちは、イエスをお護りして、嵐を乗り切ろうと頑張りました。しかし、とうとう力尽きて、眠っておられるイエスを起こして助けを求めました。弟子たちにとって、この時ほど、自分たちの無力を思い知らされた時はなかったでしょう。ガリラヤ湖の「主人」であるかのように考えていた弟子たちが、そのガリラヤ湖で、行き詰まり、自分たちが一番得意とする舟をあやつることにおいて、どうにもならなくなったからです。そして、最後には、イエスの助けを願わなければなりませんでした。弟子たちは、自分たちがイエスを乗せて向こう岸に行くというよりは、イエスが自分たちを導いて向こう岸に連れていってくださる。自分たちが眠っているイエスをお護りするというよりは、イエスが、眠っている間も自分たちを守ってくださるということを知らされたのです。

じつは、これと似た体験は、以前にもありました。夜通し漁をしたのに、一匹の魚もとれなかった、あの日のことです。イエスはシモンの舟に乗り、沖に漕ぎ出して

網をおろすように言いました。シモンは思いました。「魚は夜、浅瀬でとれるもの。こんな日中に湖の真ん中でとれるわけがない。いくらイエスさまでも、漁のことはご存知ないようだ。」けれども、「お言葉ですから…」と言って網をおろしました。すると、おびただしい数の魚が網に入ってきました。もう一艘の舟にも助けてもらいましたが、両方とも沈みそうになるほどの大漁でした。このとき、シモンは「漁にかけては私が…」というプライドを砕かれ、イエスを主として受け入れ、イエスに従うようになったのでした（ルカ 5:1-11）。

私たちが失敗するのは、きまって、自分の得意とする分野においてです。不得意なことは慎重にやりますし、人の助けを求めますが、得意な分野では、自分の力を過信してしまいます。そして、思わぬ失敗をしてしまうのです。そんなときこそ、自分の人生の主がイエスであることを悟りたいと思います。イエスの力あるわざを、遠い世界のこととして読むだけでは、その力を自分のものとすることはできません。他の人が、イエスの愛や恵みについて証しするのを、他人事として聞いているうちは、イエスの恵みに与ることはできません。そうしたことを自分自身と結びつけ、自分が今、直面している問題についてイエスに助けを願い求めてこそ、イエスの恵みと力を体験することができるのです。聖書を自分の現状にあてはめて読むなら、聖書が、私たちの現実からかけ離れたものではないことが分かるようになるでしょう。そして、イエスが「神の御子」であるとともに、「私の

主」であることが分かり、このイエスに信頼することが、人生の嵐を乗り越え、安らかに向こう岸に到着する唯一の道であることが分かるようになるのです。

「いったいこの方はどういう方なのだろう。」この問いに対する答を、皆さんはすでに持っていますか。自然界をも支配され、あらゆるものの上におられる「神の御子」イエス・キリストを、あなたの「主」として受け入れているでしょうか。あなたが今抱えている困難や課題を「神の御子」であり、私たちの「主」であるイエスに任せ、このお方に信頼しましょう。その時、私たちは、聖書を読むたびに、聖書に書かれたイエス・キリストの姿をくっきりと見ることができるようになるのです。

（祈り）

父なる神さま。あなたは、私たちがキリストを知り、信じ、救いにあずかることができるために、私たちに聖書を与えてくださいました。聖書を学ぶたびに、キリストを新しく、また深く知ることができますよう導いてください。時代を越えて語りかける聖書の言葉を、私たちの日々の生活の中で受けとめることができるよう助けてください。神の御子、私たちの主、イエス・キリストのお名前で祈ります。

五千人の給食
ルカ 9:10-17

9:10 さて、使徒たちは帰って来て、自分たちのして来たことを報告した。それからイエスは彼らを連れてベツサイダという町へひそかに退かれた。
9:11 ところが、多くの群衆がこれを知って、ついて来た。それで、イエスは喜んで彼らを迎え、神の国のことを話し、また、いやしの必要な人たちをおいやしになった。
9:12 そのうち、日も暮れ始めたので、十二人はみもとに来て、「この群衆を解散させてください。そして回りの村や部落にやって、宿をとらせ、何か食べることができるようにさせてください。私たちは、こんな人里離れた所にいるのですから。」と言った。
9:13 しかしイエスは、彼らに言われた。「あなたがたで、何か食べる物を上げなさい。」彼らは言った。「私たちには五つのパンと二匹の魚のほか何もありません。私たちが出かけて行って、この民全体のために食物を買うのでしょうか。」
9:14 それは、男だけでおよそ五千人もいたからである。しかしイエスは、弟子たちに言われた。「人々を、五十人ぐらいずつ組にしてすわらせなさい。」
9:15 弟子たちは、そのようにして、全部をすわらせた。
9:16 するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福して裂き、群衆に配るように弟子たちに与えられた。
9:17 人々はみな、食べて満腹した。そして、余ったパン切れを取り集めると、十二かごあった。

イエスが二匹の魚と五つのパンを増やし、五千人以上の人々を満腹させた奇跡は、ガリラヤ湖に面したベツサイダという町の近くで行われました。そこには今も、イエスの奇跡を記念する教会が建っています。ヨハネ 6:4 に

よると、それは過越の祭りが近づいた春先のころでした。ヨハネ 6:10 には、人々が草の上に座ったとありますが、イスラエルで草がたくさんあるのはこの時期以外にありません。ですから、この奇蹟が行われたのは、十字架のちょうど 1 年前ということになります。今回は、この奇蹟が、「王」であるイエスを指し示していることを学びましょう。

一、王であるイエス

ルカ 9 章のはじめには、イエスが十二弟子を町々村々に遣わし、「神の国」を宣べ伝えさせたことが書かれています。やがて、弟子たちが宣教旅行から帰ってきたとき、イエスは弟子たちといっしょに、カペナウムからベツサイダに退きました。彼らに休息を与えるためでした。ところが、イエスがベツサイダに行ったことを知った群衆はイエスのあとを追いかけてきました。それでも、イエスは「喜んで彼らを迎え、神の国のことを話し」ました（11 節）。

ヨハネ 6:3 によると、この時、「イエスは山に登り、弟子たちとともにそこに座」りました。これは、マタイ 5 章を思い起こさせます。マタイ 5:1-2 にこうあります。「この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。」ここで「山に上り、座る」とあるのは、そこに腰をおろしたことを言っているだけではありません。これは、王が臣下たちを従え、段と高い玉座に座ることを意味しています。イエスは、イスラ

エルの王として来られたお方です。本来なら、王宮の玉座に着座されるべきお方です。その頭には冠もなく、質素なみなりではあっても、イエスは「神の国」の王です。ですから、たとえそれが山の上にころがっている石のひとつであっても、イエスがそこに座るとき、そこは玉座となり、そこから語られる言葉は、王の詔となるのです。古代の王たちは、ある地域を自分の支配下に置いたときには、すぐさま新しい法律を作り、賞罰を明らかにしました。イエスも神の国の到来を宣言し、人々に神の民としての生き方を教えたのです。

二、民を養う王

人々は熱心にイエスの教えに耳を傾け、時の経つのも忘れるほどでした。それで、弟子たちは、太陽が傾きかけたのを見て、イエスに言いました。「この群衆を解散させてください。そして回りの村や部落にやって、宿をとらせ、何か食べることができるようにさせてください。私たちは、こんな人里離れた所にいるのですから。」（12 節）ところがイエスは「あなたがたで、何か食べる物を上げなさい」（13 節）と答えました。そこには「五つのパンと二匹の魚」しかありませんでした。そんなわずかなものでは、五千人もの人々に何の役にも立ちません。どう考えても、人々を解散させるのが、常識にかなっており、弟子たちは、イエスから無理なことを命じられたように思ったことでしょう。

イエスは弟子たちに、「あなたがたで、何か食べる物を上げなさい」と言いましたが、「あなたがただけで」

とは言いませんでした。イエスが私たちに何かを命じるとき、それを私たちの力だけで達成せよとは言われません。必ず私たちを助け、私たちに命じたことを達成させてくださいます。助けを与えることなく、命令を与えることはありません。しかし、弟子たちは、イエスの助けによって出来るという信仰を持つことができなかったのです。

ピリピ 2:13 に「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださる」とあります。これは、神の働きにおいては、私たちが何かを願い、計画し、働いているように見えるけれども、じつは、神が私たちの心に願いを起こし、計画を与え、私たちを働かせてくださっているのだということを言っています。主体は神であって、私たちはそれに加わらせていただいているのです。

五千人の給食の場合も同じでした。イエスは「あなたがたで、何か食べる物を上げなさい」と言いましたが、その食べ物を用意したのはイエスご自身でした。弟子たちは、それを配ることによって、イエスの奇蹟に加わったのです。イエスは、そこにあった「五つのパンと二匹の魚」をまず 12 弟子たちにに分けました。そんなわずかなものを 12 に分けたら、弟子たちのひとりひとりが受け取るのはもっとわずかになります。ところが、弟子たちの手にわたる時には、抱えきれないほどに増えていました。イエスは人々を 50 人づつ組にして座らせていましたから、弟子たちは、一回につき 50 人分の食べ物を渡さ

れ、イエスと人々との間をおよそ10往復したことだろうと思われます。弟子たちは、イエスの言葉どおり、自分たちで、人々に食べ物を与えることができたのですが、それはイエスの奇蹟の力によるものでした。

この奇蹟は、イエスが人々を養う王であることを明らかにしています。詩篇23篇でダビデはこう歌いました。「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。」（詩篇23:1-2）羊飼いが羊に青草を与えるように、一国の「牧者」である王は、その民に豊かな糧を与えます。ダビデが歌ったのは、後に「ダビデの子」として世においでになるイエス・キリストのことでした。ダビデはこのとき、知らずして、イエス・キリストを預言していたのです。

王であるイエスは、霊の糧である神の言葉によって私たちのたましいを満たすとともに、私たちの生活の必要をも満たしてくださいます。詩篇37:25には「私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない」とありますが、私は、自分のことででも、他の信仰者のことででも、この御言葉が真実であることを数多く見てきました。皆さんも、同じだと思います。イエス・キリストは、信じる者を豊かに養ってくださる、私たちの王です。

三、自らを捧げる王

人々はこの奇蹟に驚きはしましたが、それが意味して

いることを正しく理解するには至らなかったようです。けれども、ヨハネ 6:15 を見ると、「そこで、イエスは、人々が自分を王とするために、むりやりに連れて行こうとしているのを知って、ただひとり、また山に退かれた」とあります。人々は、この奇蹟によってイエスが王であることを部分的に受け入れました。しかし、それは、こんな奇蹟ができるイエスを新しい王にすれば、ローマに戦いをいどんで籠城しても、食べ物に困ることはないと考えたからにすぎませんでした。

それで、イエスは「わたしはいのちのパンです」（ヨハネ 6:48）と言いました。イエスは人々の都合にあわせてパンを与える王ではない。ご自身が、「パン」であり、人々にご自身を「パン」として与えると言われたのです。そして、こう続けました。「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」（ヨハネ 6:51）これを聞いた人々は、「この人は、どのようにしてその肉を私たちに与えて食べさせることができるのか」と言って、イエスとその言葉に躓きました。霊的な救いや霊の糧を求める心がなく、地上のこと、胃袋を満たす「パン」のことだけしか考えていなかったからです。

イエスはさらにこう言いました。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはあ

りません。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。」（ヨハネ 6:53-57）これはイエスの死、しかも十字架の死のことを指しています。イエスは十字架でそのからだを裂き、血を流しました。ご自分の命を注ぎ出して、私たちを生かしてくださったのです。「パン」も「血」もともに「命」を表します。イエスのからだを食べ、その血を飲むとは、イエス・キリストを信じて、永遠の命を受けることを言っています。「罪の赦し」のために祭壇の上で犠牲が裂かれ、血が流されなければならないことは、ユダヤの人々なら誰でも知っていることでした。イエスが使った「終わりの日」や「よみがえり」という言葉もユダヤの人には新しいものではありませんでした。「永遠の命」は、人々が求めてやまないものでした。しかし、人々は、その「永遠の命」がイエスにあることを信じなかったのです。

また、人々は、王が人々の身代わりに死ぬ、牧者が犠牲の子羊のように血を流すということを理解しませんでした。しかし、王が国民のために死ぬということは、全くなかったわけではありませんでした。多くの人々を救

うため、自らの命を犠牲にした人々もいたのです。

日本での出来事ですが、1582年、戦国時代の備中（岡山県）高松城の主将清水宗治は、わずかな人数で、秀吉の軍勢を防いでいました。それに手を焼いた秀吉は、高松城が低湿地にあることに目をつけ、大規模な堤防を作り、川の水を城に向けて流し込みました。梅雨の時期でもあり、高松城は城内まで水浸しとなり、湖の中の孤島のようになりました。

この時、本能寺の変が起こりました。信長の死を知った秀吉は和睦を急ぎ、和睦の条件に宗治の命を求めました。宗治は自分ひとりの死によって高松城にいる五千の兵と領民が救われるのならと、それを受け入れました。城にいた一同はそのことを聞いて泣きむせびました。それは、自分たちが救われて良かったといった利己的なものではありませんでした。宗治の城主としての真実に対する感動の涙でした。6月23日、宗治は小舟に乗り、秀吉の陣地に向かい、46歳で世を去りました。彼の死は秀吉はじめ敵方の武将たちにも賞賛されるものでした。宗治の「身代わりの死」は、神の御子の尊い死とはくらべものになりませんが、イエスの十字架の死を理解する助けになると思います。

イエスは、王です。イエスは王として私たちに必要なパンを与えてくださいますが、イエスが与えるパンとは、じつは、イエスご自身なのです。イエスは、「わたしはいのちのパンです」「わたしを食べなさい」と言って自らを差し出しておられます。イエスが「いのちのパ

ン」で「イエスを食べる」というのは、イエスを信じるということが、イエスの教えを精神修養のひとつとして受け入れるという以上のものであることを教えています。それは、ご人格であるイエス・キリストを、まるごと受け入れるということを意味しています。キリストを、「おやつ」や「お菓子」のようにしてではなく、このお方なしには、生きてはいけない「主食」として食べること、イエスを信じて、イエスの命で生かされることなのです。そのような信仰によって、キリストを私たちの心に、生活に、人生に迎え入れましょう。そしてこのお方によって生かされる豊かな命を喜び、楽しみ、それによって養われ、成長したいと思います。そして、弟子たちが人々にパンを配ったように、「いのちのパン」であるキリストを人々に届ける者となりたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、私たちにまことの食べ物、まことの飲み物であるイエス・キリストをお与えくださったことを感謝します。イエスは言われました。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」（ヨハネ 10:10）どうぞ、イエス・キリストへの信仰によって、イエスがくださる命の豊かさを、日々に体験させてください。私たちの王であり、主であるイエス・キリストのお名前で祈ります。

わたしを誰と言うか
ルカ 9:18-22

9:18 さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいっしょにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」
9:19 彼らは、答えて言った。「バプテスマのヨハネだと言っています。ある者はエリヤだと言い、またほかの人々は、昔の預言者のひとりが生き返ったのだとも言っています。」
9:20 イエスは、彼らに言われた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えて言った。「神のキリストです。」
9:21 するとイエスは、このことをだれにも話さないようにと、彼らを戒めて命じられた。
9:22 そして言われた。「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。」

一、人々の意見

きょうの箇所は、マタイ 16:13 によると、「ピリポ・カイザリヤ」という場所での出来事です。ヘロデ大王の死後、その領土は三人の息子たちに分割されました。ユダヤとサマリヤがアケラオに、ガリラヤとペレアがアンティパスに、そして、イッツリアとテラコニテがピリポにです。アケラオが引き継いだユダヤとサマリヤは、やがてローマから派遣された総督ピラトが治めることになりましたが、アンティパスとピリポはそれぞれの地域の領主として残りました。このことは、ルカ 3:1 にこう書かれています。「皇帝テベリオの治世の第十五年、ポンテ

オ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの国主、その兄弟ピリポがイツリヤとテラコニテ地方の国主、ルサニヤがアビレネの国主であり、アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った。」

イエスが「パンの奇蹟」を行ったベツサイダはピリポの領地でした。そこから北へまっすぐ 40 マイルほど上ったところにあるのが、ピリポ・カイザリヤです。「カイザリヤ」という名前は「カイザル」（ローマ皇帝）を称えて名付けられました。サマリヤの海岸にも「カイザリヤ」という港町がありますので、それと区別するため、こちらは「ピリポ・カイザリヤ」と呼ばれました。

「ピリポ・カイザリヤ」はヘルモン山のふもとにある風光明媚なところで、ガリラヤ湖の水源地となっています。イエスは弟子たちに休息を与え、また、確かな信仰に導くため、ふだんの場所から離れてここに来ました。キリスト者にとって毎週の日曜日は安息日ですが、教会の奉仕で忙しくしてしまい、心身を十分に休めることができないこともあります。それで、多くの教会では、年に一度は、日常から離れ、自然の中で時を過ごすリトリートを行っています。そうした中で、リフレッシュされ、恵みに満たされ、新しい歩みのため備えられるのです。これはイエスと弟子とのリトリートだったのです。

今日の箇所から少しあと、ルカ 9:51 に「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ…」とありま

す。ピリポ・カイザリヤはイエスが旅行した最北端で、このあとイエスは南へと向かっていきます。それは十字架が待っている最後の旅行でした。イエスは、このリトリートによって、弟子たちをエルサレムへの最後の旅行に備えさせようとしたのです。

この時、イエスは弟子たちに二つの質問をしました。ひとつは「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか」（18 節）で、もうひとつは「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」（20 節）です。似てはいますが、違う質問です。最初の質問は、「人々はイエスのことをどう考えているか」というのものです。これは、ふたつ目の質問に導くためのものですが、この質問も大切ですので、弟子たちがどう答えたかを見ておきましょう。

「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」この質問に、弟子たちは、「バプテスマのヨハネだと言っています。ある者はエリヤだと言い、またほかの人々は、昔の預言者のひとりが生き返ったのだとも言っています」（19 節）と答えました。

弟子たちが、まず「バプテスマのヨハネ」の名をあげたのは、バプテスマのヨハネの死後すぐにイエスの活動が本格化したので、人々が「バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が、彼のうちに働いているのだ」（マルコ 6:14）と言っていたからです。バプテスマのヨハネは、預言者マラキ以来、400 年目にして現れた預言者で、その登場は人々を興奮させ

ました。それにくらべ、イエスの活動は、最初は目立たないものでしたので、イエスをバプテスマのヨハネの弟子のひとりと考える人もいたのです。しかし、バプテスマのヨハネ自身は、「私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません」（ルカ 3:16）と言って、イエスを「来たるべきお方」、キリストであると証言しています。

次の答は「エリヤ」です。エリヤは列王記第一 17 章から列王記第二 2 章に登場する預言者で、バアルの預言者と闘った人です。彼は、預言者の中で最大の人物とされ、ユダヤの人々にとっては英雄的な存在でした。聖書に、「見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす」（マラキ 4:5）とあるので、人々は、イエスを聖書に約束された「エリヤ」だと考えたのです。しかし、イエスは、バプテスマのヨハネが「エリヤ」であったと言っています（マタイ 17:11-13）。人々は、「昔の預言者のひとりが生き返ったのだ」とも言っていましたが、イエスは、そうした預言者以上のお方です。

「人々はわたしのことをだれだと言っているか。」現代ではどんな答になるでしょうか。信仰を持たない人たちは、イエスを多くの人に影響を与えた人物として称賛したとしても、志なかばで殉教したひとりの人としか考えていません。聖書に親しむことのない日本の人々の間では、イエスはキリスト教の教祖でしかありません。ま

た、自分たちに関係のない人、日本人には必要のない人という考えを根深く持っています。イエスに対する人々の考えが、二千年たった今も、ほとんど変っていないのは、残念です。

二、あなたの信仰

では、第二の質問に移りましょう。イエスは「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」（20節）と問いました。ここで、イエスは、人々の意見や考えではなく、弟子たち自身の意見と考えを尋ねています。第一の質問が「客観的な」質問だとしてら、第二の質問は「主観的な」質問です。いや、この質問には、「あなたにとってわたしは誰なのか」という意味がありますから、「人格的な」質問と言ってよいでしょう。

聖書の真理を客観的に学ぶだけなら、「物知り」にはなれても、聖書が生きる力となり、喜びとなり、慰めとはなりません。聖書に書かれていることを、他人事としてではなく、自分のこととして読む必要があります。イエスの教えを聞き、奇蹟を見てイエスを信じた人もいれば、信じなかった人もありました。イエスに従った人もあれば、イエスのもとから去っていった人もありました。イエスを慕い求めた人もあれば、イエスを妬み、憎み、そして斥けた人もありました。そうしたことを読み、学ぶとき、「私だったらどうしただろうか」と考えて見ることが大切です。そのようにしてはじめて、私たちは「わたしを誰と言うか」という質問に答えることができるのです。

この質問に、真っ先に答えたのはペテロです。ペテロは答えました。「神のキリストです。」（20 節）ここはマタイでは、もっと完全な形で「あなたは、生ける神の御子キリストです」（マタイ 16:16）となっています。

イエスはペテロが答えたとおり、神の御子キリストです。イエスは、大祭司から「あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい」と言われたとき、「あなたの言うとおりです」と、はっきりと答えています。イエスが神の御子キリストであることは、聖書が預言し、バプテスマのヨハネが証言し、イエスご自身がそう語り、イエスの行った奇蹟が証明しています。イエスと四六時中行動を共にした弟子たちも、その体験から、イエスが「神の御子キリスト」であると、告白し、証ししているのです。

「あなたは、生ける神の御子キリストです。」これは、「わたしを誰だと言うか」という質問の「正解」であり、「模範解答」です。私たちはすでに答を知っています。しかし、知っていることと、それを理解し、確信することとは違います。アメリカの教科書には、練習問題の答が別のページに載っていることがあります。こどもたちが計算問題の宿題をするとき、その答を写すだけでは、ほんとうに問題に答えたことにはなりません。なぜその答になるのかということを理解することが大切なのです。イエスの質問への答も同じです。イエスは私たちに「あなたはどう答えるのか」と、ひとりひとりに問いかけています。私たちは、「私とあなた」という人格

の関係の中でイエスと向き合って、それに答えなければなりません。イエスはそうした答を求めているのです。

「あなたはわたしを誰だと言うか。」この問いに、皆さんは、すでに答えましたか。そう答えたことで、皆さんは何を得ましたか。人生がどう変わりましたか。イエスは、さまざまな場面で、「あなたはわたしを誰だと言うか」「わたしはあなたにとって誰なのか」と、私たちに問い続けています。私たちは、その問いに答え続けているでしょうか。イエスの問いに答え続けていくこと、それが、信仰の生活なのです。

三、告白の力

イエスは、「あなたは、生ける神の御子キリストです」と答えたペテロに、「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです」（マタイ 16:17）と言って祝福を与えました。ところが、イエスは、「このことをだれにも話さないようにと、彼ら（弟子たち）を戒め」ました（21 節）。なぜでしょう。それは、イエスがまだ十字架の苦難と復活を通っていなかったからです（22 節）。人々はキリストを、その力と栄光によって敵を打ち破り、人々に救いを与えるお方と考えていました。しかし、イエスはこれから向かうエルサレムで、人々から斥けられ、辱められ、苦しめられ、敵の手に渡されて殺されようとしているのです。キリストが苦難を受けることは聖書に預言されていたことでしたが、この時、人々はそのことをよく理解していませんでした。それで、イエスは復活の後、それによって十字架の意味を解き明かそうとしました。復活

を、ご自分が「神の御子キリスト」であることの証明として用いようとしたのです。それで、イエスは、この時は、「イエスはキリスト」という信仰の告白を心のうちに秘めておくように命じたのです。

しかし、復活の後は違います。ペテロはペンテコステの日の説教でこう言いました。「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」（使徒 2:24）「神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。」（32 節）「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」（36 節）「神が、今や主ともキリストともされたこのイエス」というのは、人間イエスが復活の後、神の御子キリストになったという意味ではありません。イエスはもとから神の御子です。神の御子が人間イエスになったのです。これは、復活によって、イエスが神の御子キリストであることが明らかになったという意味です。

イエスの復活の後、弟子たちは、イエスが神の御子キリストであると宣べ伝え、人々はそう告白して救われていきました。ローマ 10:9-10 に「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死

者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」とある通りです。「イエスは神の御子キリスト。」この告白には人を救う力があります。私たちは礼拝のたびごとに使徒信条で「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず」と唱え、主に向かって、「あなたこそ、生ける神の御子キリストです」と告白しています。また、この告白は、私たちを救うだけではなく、この告白を聞いてキリストを信じる人々を救う力があります。「イエスは神の御子キリスト。」この告白がもたらす救い、祝福、力、恵みは、人々に分け与えることができるのです。

（祈り）

父なる神さま、あなたは数々の奇蹟によってイエスが神の御子キリストであることを証ししてくださいましたが、今は、イエスの復活によって、そのことをより確かなものとしてくださいました。イエスの復活の後に生きる私たちは、「イエスは神の御子キリストです」と告白し、証ししていきます。どうぞ、私たちを、真実で、大胆な告白へと導いてください。イエスのお名前で祈ります。

変貌の山で
ルカ 9:28-36

9:28 これらの教えがあってから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブとを連れて、祈るために、山に登られた。
9:29 祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いた。
9:30 しかも、ふたりの人がイエスと話し合っているではないか。それはモーセとエリヤであって、
9:31 栄光のうちに現われて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである。
9:32 ペテロと仲間たちは、眠くてたまらなかったが、はっきり目がさめると、イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た。
9:33 それから、ふたりがイエスと別れようとしたとき、ペテロがイエスに言った。「先生。ここにいることは、すばらしいことです。私たちが三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」ペテロは何を言うべきかを知らなかったのである。
9:34 彼がこう言っているうちに、雲がわき起こってその人々をおおった。彼らが雲に包まれると、弟子たちは恐ろしくなった。
9:35 すると雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい。」と言う声がした。
9:36 この声がしたとき、そこに見えたのはイエスだけであった。彼らは沈黙を守り、その当時は、自分たちの見たこのことをいっさい、だれにも話さなかった。

イエスが、ペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人の弟子といっしょに祈っていると、イエスの顔も、着物も、光り輝き始めました。イエスが栄光の姿に変わったのです。それで、この出来事は、「主の変貌」（“The Transfiguration of the Lord”）と呼ばれ、8 月 6 日がその記

念日となっています。「変貌」とは言いますが、じつは、この時の栄光の姿が、イエスの本来の姿だったのです。私たちを救うため、人となって、私たちと変わらない姿となったことのほうが「変貌」なのかも知れません。「栄光」とは、見えない神の力や性質が、目に見える形で表されることを言いますが、父なる神は、これまでも、イエスがおこなった奇蹟などによって、イエスの栄光を示してこられました。この時は、イエスの本来の栄光のすべてを見せてくださったのです。この変貌の山での出来事が、私たちに何を教えいるのかを学びましょう。

一、聖書の証言

変貌の山での出来事は、第一に、イエスが「生ける神の御子キリスト」であることを証言し、教えるものでした。

弟子たちは、イエスが栄光の姿に変わったことに驚きましたが、もっと驚いたのは、そこにモーセとエリヤが現れたことでした。30 節は、直訳すると、「そして、見よ、ふたりの人が彼と話し合っていた。彼と一緒にいたのはモーセとエリヤだった」となります。「見よ」という言葉で驚きを表しています。モーセはイエスの時代から千数百年、エリヤも何百年も前のた歴史上の人物です。そんな人たちが現れたのですから、驚くはずです。この箇所から、神のしもべたちが世を去った後も天にいて、神に仕えていることが分かります。天には天の教会があって、信仰を持って生涯を終えた人々がそこで御使

いたちと共に礼拝をしているのです。世の終わりに、主は、天の聖徒たちと共に地に来るでしょうが、この時は、特別にモーセとエリヤだけがやってきました。しかし、なぜ、モーセとエリヤなのでしょうか。

それは、モーセが律法を、エリヤが預言者を代表する人物だからです。私たちが「旧約聖書」と呼んでいる書物は、ユダヤの人々の間では「律法と預言者」と呼ばれています。イエスも聖書を「律法と預言者」と呼びました（マタイ 5:17、マタイ 7:12）。そして、この聖書はキリストを証しするものでした。　ピリポが友人のナタナエルに「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです」（ヨハネ 1:45）と言った通りです。モーセとエリヤのふたりが現れたのは、イエスが律法と預言者、つまり、聖書が預言している神の御子キリストであることを証言するためだったのです。

神は、世の終わりに、モーセやエリヤに匹敵するような人を遣わし、キリストの証人とされますが（黙示録 11:3, 6）、今の時代はモーセとエリヤを、律法と預言者から成り立つ「聖書」という形で遣わしておられます。私たちは、聖書によって、イエスが神の御子キリストであるとの確かな証しを持っているのです。

二、イエスの苦難

変貌の山での出来事は、第二に、イエスの苦難を予告し、教えています。

31 節に、モーセとエリヤのふたりが「栄光のうちに現

われて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していた」とあります。この「最期」というのは、十字架と復活のことです。イエスは弟子たちに「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならない」（ルカ 9:22）と告げていました。

イエスが「人の子は、必ず殺され、そして…よみがえらねばならない」と言った、「ねばならない」という言葉ですが、これはヨハネ 4:3-4 にも使われています。「主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。しかし、サマリヤを通って行かなければならなかった」と書かれています。ユダヤとガリラヤを結ぶルートにはサマリヤを通る道と、ヨルダン川ぞいの道がありましたが、多くの人は、サマリヤを避け、ヨルダン川ぞいの道を使っていました。しかし、イエスはあえてサマリヤを通る道を選びました。それは「サマリヤの女」に会い、彼女を通してサマリヤの人々にご自分を表すためでした。「サマリヤを通っていかなければならなかった」という言葉は、イエスの行動の背景に、深い神の計画があったことを教えています。

イエスが「必ず多くの苦しみを受け…ねばならない」と言ったのも、これと同じです。イエスの死は、ユダヤの指導者たちの策略に巻き込まれた不幸な死ではありません。それは、神が全人類のための救いのために定められたものであって、「必ず果たされなければならない」

ものだったのです。イエスは、「ねばならない」という言葉によって、父より与えられた使命を忠実に果たす決意、私たちの救いのために進んでご自分を捧げる愛を示したのです。

そして、その決意と愛は、地上の弟子たちだけでなく、この時、モーセとエリヤを通して、天にも伝えられただろうと思います。そして、そのことが天に伝えられたときには、御使いたちや天の聖徒たちの間で大きな驚きが起こったのではないかと想像できます。神の御子が地上で人々から拒否され苦しみを受ける。聖なるお方が罪人となって裁きを受ける。王の王、主の主であるお方が、地上の権力者の手に渡される。いのちの主であるお方が死を味わう。そんなことはあってはならないことです。しかし、このあってはならないことによってしか、人は救われないのです。

神の御子キリストの苦難は、聖書に預言されていたことでしたが、預言者たちも、それを十分には理解していませんでした。ペテロ第一 1:10-11 に、こう書かれています。「この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。」そして、続く 12 節にはこうあります。「そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を

通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。」私たちは律法と預言者という旧約聖書に加えて、イエスと使徒たちの教えが書かれた新約聖書を持っています。私たちは、変貌の山で弟子たちが見聞きした以上のことを、今、旧約と新約の両方の聖書から知らされているのです。30 節の「見よ」は「驚き」を表すとともに、読者に注意を促す言葉です。聖書が「見よ」と言うように、主イエスの苦難の意味をしっかり見て、信じて、理解して、人々にも「見よ」と呼びかけたいと思います。

三、イエスの栄光

変貌の山での出来事は、第三にイエスの栄光を示し、教えるものでした。

イエスの栄光は、イエスの顔も着物も光り輝いたことによって表されていますが、それだけではなく、31 節の「イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期」という言葉にも表れています。この「最期」にはギリシャ語で ἔξοδος（エクソドス）、「脱出」という意味の言葉が使われています。“Book of Exodus”と言えば「出エジプト記」のことです。ここでこの言葉が使われているのは、「出エジプト」がイエスの十字架による救いの雛形となっているからです。イスラエルの人々がエジプトの奴隷から救われたように、イエス・キリストは私たちを罪と死の奴隷から救ってくださいました。出エジプトのとき、過越の子羊が捧げられたように、イエス

は「神の子羊」となって、私たちの身代わりとなってくださいました。イエスは十字架の上でその「最期」を遂げましたが、その「最期」は人々を罪と、死と、滅びから「脱出」させ、神の国へと導くものであり、イエスご自身も復活によって「栄光への脱出」をするのです。

この時、ペテロは、「先生。ここにいることは、すばらしいことです。私たちが三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ」（33 節）と言いました。これは、イスラエルの人々がエジプトを出て約束の地に入るまで荒野でテント生活をしたことに関係しています。イスラエルの荒野での生活は不自由なものでした。それだけに、それは、イスラエルの人々が神とのまじわりを一番深めた時だったかもしれません。荒野では、食べ物も水も不足しており、道のないところを進んできます。人々は、あらゆることにおいて神に頼り、毎日、主の導きを求めました。神もまた人々とともにいて、人々の必要のすべてを与えてくださいました。それで、イスラエルでは、今でも「仮庵祭」といって、自分の家の庭や軒先に仮小屋を作って、そこに、秋の収穫物を持ち込み、神の救いの豊かさを感謝します。ペテロは自分でも何を言ってよいかわからずに、「仮小屋を作りましょう」と言いましたが、それは、イエスが与えてくださる救いの豊かさを言い表すものとなりました。

すると、34 節に「雲がわき起こってその人々をおおった。彼らが雲に包まれると、弟子たちは恐ろしくなっ

た」とあるように、変貌の山は雲で覆われました。これは、荒野で幕屋の神殿が完成したとき、その中に雲が満ちたことに関連しています（出エジプト 40:34, 35）。神殿に満ちた雲は栄光を表します。イエスは、ご自分を「神殿」であると言いましたから（ヨハネ 2:19-22）、イエスのおられるところが栄光の雲で満たされ、神の「臨在」が表されたのは不思議ではありませんでした。

そして、その雲の中から「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい」（35 節）という声がしました。「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である」というのは、イエスのバプテスマの時に天から語られた声でした。弟子たちは、同じ声を、ここで聞くことによって、このイエスが神の御子、栄光の主であり、自分たちが聞き従うべきお方であることを教えられたのです。

この後イエスは弟子たちを連れてエルサレムに向かいます。イエスは苦難の道を歩み十字架に至りますが、弟子たちが苦難に負け、失望してしまわないよう、十字架の後に復活が、苦難の後に栄光が続くことを、この変貌の山で、弟子たちに、あらかじめ示してくださったのです。

今、暗い時代を通っている私たちも、どうかすれば、苦しくつらいことだけに目が行って、栄光が待っていることを忘れることがあります。世の中がどんなに困難になっても、苦難の道を歩くことがあっても、私たちの主は、栄光の主であり、天からこの地上を治めていてくだ

さる。どんな困難や苦しみがあったとしても、そこにはかならず「脱出」の道があります。そのことを知り、信じて、暗い時代にも、イエスの栄光をたたえ、人々に主の栄光を示す者となりたいと思います。

そのためにも、弟子たちが見たように、イエスの栄光を仰ぎ見ましょう。変貌の山での出来事がそのままくりかえされ、私たちの目の前にモーセやエリヤが現れることはないでしょう。しかし、父なる神が「彼の言うことを聞きなさい」と言われたように、イエスは、今も聖書によって私たちに語りかけています。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています」（ペテロ第一 1:8）とあるように、私たちも、イエスの言葉に聞くことにより、信仰によってイエスの栄光を仰ぎ見ることができます。「輝け、主の栄光、地の上に」という賛美のように、主の栄光を称え、それを証ししていきたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、私たちにもイエスの栄光を仰ぎ見ることを許してくださり、感謝します。私たちのために苦難の道を歩まれたイエス・キリストこそ、栄光に至る道です。このイエス・キリストを仰ぎ、イエスの栄光を表す私たちとしてください。イエスのお名前で祈ります。

福音と日本文化 ⑪ ―あとがきにかえて

教会は国境、国語、民族をこえて「全地」に広がる普遍的なものです。「使徒信条」で「聖なる公同の教会」とある「公同の」（英語では catholic）という言葉は、「全地」という言葉から生まれました。したがって教会は常に世界的な信仰の「連帯」を保ってきました。

しかし、このことは、自らを「現人神」（あらひとがみ）である天皇が治める「神の国」とし、世界の中で孤立していた戦時下の日本にとっては、不都合なことでした。それで、政府は日本のキリスト教会を支配下に置き、日本の教会は「日本的キリスト教」を中国や韓国の教会にも押し付け、それに反対する者を迫害しました。

日本基督教団統理・富田満が「神社参拝は宗教ではなく、国家儀式である」と言って、韓国の牧師たちに神社参拝を強要したとき、朱基徹（チュ・キチョル）牧師は富田統理に対し、「富田牧師、あなたは豊かな神学知識をもっておられる。しかし、あなたは聖書を知りません。神社参拝は明らかに第一戒を破っているのに、どうして罪にならないと言われるのですか」と反論しました。1938 年 6 月末のことでした。そのため、朱牧師はその後五度も刑務所に送られました。1940 年、朱牧師は「神社参拝」拒否者の一斉検挙のおり投獄され、1944 年 4 月 21 日、平壌刑務所で殉教しました。

日本の教会は、戦後、国家統制から解放された後、戦時中、アジアの諸教会に対して犯した罪を悔い改め、それを公けに言い表し、謝罪と和解のために力を尽くしました。福音は常に、神と人との間に、また人と人との間に、悔い改めと謝罪、そして和解をもたらすのです。

〔注〕2018 年に KBS で放送された朱牧師のドキュメンタリー番組「一死覚悟」（日本語字幕つき）は次で見ることができます。
https://www.youtube.com/watch?v=N2ND2PgKwWM

Penguin Club
www.penguinclub.net